

まず、次の「ものみの塔」の一節をお読み下さい。

「イザヤは、「あなた方が右に行くにしても左に行くにしても、あなたの耳はあなたの後ろで、『これが道である。あなた方はこれを歩め』と言う言葉を聞くであろう」と預言しました。『わたしたちの耳』は『後ろで言う言葉』をどのようにして聞くのでしょうか。今日、神の実際の声を聞いたり、神から個人的なメッセージを受けたりする人はいません。

『後ろで言う言葉』は、『時に応じた食物』を供給する「忠実で思慮深い奴隷」を通してもたらされます。一つの方法として、この食物は聖書に基づく印刷物の形で供給されており、近年この食物は豊かに供給されています。」ー塔99 5/9 18ページ 10節

人々は現在、「神の言葉」を「ものみの塔」の出版物を通して聞くことができると述べられています。その根拠は何でしょうか。果たして、それはいつ頃からどのように可能になったのでしょうか。

「聖霊は、現代の真のクリスチャンのためにも同じように活動しています。そのことが、19世紀の後半に米国ペンシルバニア州アレゲーニーにあった、聖書研究者の小さなグループの目に明らかになりました。」ー塔00 4/1 8ページ

「今日、エホバは天の領域から直接わたしたちに語りかけることはされません。聖書時代でさえ、そうした超自然的な方法で意思が伝達されるのはまれな事で、数世紀間なかったこともありました。歴史を通じてエホバは大抵、より間接的な方法でご自分の民と意思を通わせてこられました。今の時代もそうです。では、エホバが今日のわたしたちと意思を通わせる三つの方法について考えてみましょう。」ー塔00 5/1 16ページ 10節

「間接的な方法」というのは、僅かな例外を除いてほとんど、立てられた「預言者」を通して与えられました。

さて、神が今日意志を通わせる3つの方法とは「聖書」と「忠実で思慮深い奴隷級」と「良心の働き」であるとされています。このことの是非はともかくとして、「奴隷級」の役割については次のように記されています。

「どんな態度がふさわしいかをエホバに啓示していただきたいなら、自分の分を尽くさなければなりません。「異なる考え方をしている」人でも、「忠実で思慮深い奴隷」が供給するクリスチャンの出版物を手引きとし、祈りをこめて神の言葉を研究すれば、ふさわしい態度を養えます。」ー塔00 9/1 8 - 9ページ 12節

これらの「ものみの塔誌」の説明によると、今日、「忠実で思慮深い奴隷」は「神の実際の声」に代わって、エホバの「言葉を聞かせ、エホバが「より間接的な方法でご自分の民と意思を通わせ」たり、「啓示」したりする唯一の経路になっているということです。

神とのふさわしい関係を培いたいなら、まず第一に「もみの塔出版物」を研究し、第二に「祈り」次に「聖書」を研究するならそれが得られるとしています。

一番目はさておき、二番目と三番目だけでは、それは得られないという根拠は何なのでしょう。また、このリストに「キリスト」の役割がまったく触れられていないのは何故なのでしょう。聖書の述べるところからすれば、まずキリストを認めて頼ることこそがまず第一なのではないでしょうか。どうして、神との関係を持つのに、「意志を通わせる」のに「キリスト」ではなく「奴隷級」を通さなければならぬというのが第一条件なのでしょう。

この奴隷級の語る「わたしは道であり、真理の言葉を印刷出版しているものです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のもとに近づくことはできません。」ということばは、何となくどこかで聞いたことがあるように思います。

あつ、思い出しました！

「イエスは彼に言われた、「わたしは道であり、真理であり、命です。わたしを通してでなければ、だれひとり父のもとに来ることはありません。」（ヨハネ 14:6）

この聖句の「イエス」の部分を「奴隷級、もしくは、ものみの塔協会」に差し替えただけのものです。このことから、「奴隷級」はもうすっかり「キリスト」の役割を全部引き受けていることがよく理解できました。なるほど「忠実で思慮深い奴隷」として、キリストの「すべて」の持ち物を「分捕つ・」ではなく「つかさどらせて」いただいているという認識がこうした表現にでていのですね。

ところで、余談ですが、ギリシャ語の「アンチ」というのはよく「反・・・」と訳されますが、本来の意味は「代わり」という意味だそうです。ですから「アンティ・クリストス」という言葉は「反キリスト」と訳すより「擬似キリスト」「代替キリスト」と訳す方が的確な訳だということです。

さて、少し話が横道にそれましたが、ともかく、奴隷級は「神と人との経路」として、エホバからの言葉を伝えているということです。

「経路」とは、受けて渡す手だて、その途上にあるものですから、事前に預かっておくことが必要です。

「忠実で思慮深い奴隷」が神からの言葉の経路にであるためには、神から直にそのみ言葉を受けとっていなければならないはず。そのように期待できるのでしょうか。

今日、「忠実で思慮深い奴隷」を代表する？「統治体」は、実際どのようにしてエホバから言葉を受けとっているのでしょうか？

「特に予告された『終わりの時』に、奇跡的な仕方によってではなく、預言を勤勉に調査し、それを状況や起きている出来事と比較研究する結果として、…神により可能にされるというのはもつともなことです。」ー「洞察」第2巻、1087ー1088頁

「多くの場合、聖書の継続的な研究と神の預言の成就とがあいまって、聖書の教えをいつそう明

快に説明できるようになりました。」—「ふれ告げる人々」148

「今日、唯一の真のクリスチャンの組織を構成している人たちは、み使いによる啓示も神の靈感も受けていません。しかし彼らは靈感を受けた聖書を持っており、聖書には神のお考えとご意志に関する啓示が含まれています。

彼らはどのようにして神の言葉の正確な理解に到達するのでしょうか。聖書を研究する際にある聖句が理解しにくいなら、その点に光を投げかける靈感を受けた他の聖句を見いだすため、調査しなければなりません。そのように聖書によって聖書を解き明かし、それに基づいて、神の言葉が述べる真理の『型』を理解するよう努めるのです。エホバはご自分の聖霊によって彼らをそのような理解に導かれます。」—「ふれ告げる人々」708

「終わりの時に奇跡的な仕方によってではなく」と言われていますが、この執筆者は、「特に予告された終わりの時」にヨエルの預言が成就する事を知らないようです。

(この点は、この記事に続く「第3部」で扱っています)

どの時代にもまして「終わりの時」ほど神からの奇跡(的ではない)そのものがなされる時はありません。それは西暦1世紀やモーセの時代の比ではありません。少し聖書を読んだことのある人なら、そうした預言が至るところあることにお気づきになるでしょう。

「今日、唯一の真のクリスチャンの組織を構成している人たちは」という部分を「今日、全人類は」としても、意味するところは何もかわりません。それらの人だけの特徴ではなく、全ての人は、「み使いによる啓示も神の靈感も受けていません。しかし彼らは靈感を受けた聖書を」持つことができます。

従って続く部分も、地上の誰でも、どんな人間でも「聖書を研究する際にある聖句が理解しにくいなら、その点に光を投げかける靈感を受けた他の聖句を見いだすため、調査しなければなりません。そのように聖書によって聖書を解き明かし、それに基づいて、神の言葉が述べる真理の『型』を理解するよう努める」ことができますし、実際多くの人々は当然そうしています。

「彼ら」奴隷級はそのようにして神の言葉の正確な理解に到達する以外にその手だてはないということです。ということは、「奴隷級」とそうでない人たちと異なる所は何一つないということです。それで、問題はこの後の一文です。そのようにすれば、エホバはご自分の聖霊によって彼ら(奴隷級だけ)をそのような理解に導かれます。

と主張しているわけで、ここの「彼ら」を「全ての人」と置き換え得ないとする根拠はどこにあるのでしょうか。

ともかく、その主張によればエホバの証人の「統治体」は、啓示や靈感を受けてはいないが、彼らの研究や調査は聖霊によって導かれるということです。つまり、その研究、調査によって、エホバからその言葉を受けとっているということです。

ものみの塔聖書冊子協会の初代会長であるチャールズ・T・ラッセルは、この点について何と述べたのでしょうか？

「ラッセル兄弟は、自分の役割をどのようにみなしていたのでしょうか。神から何らかの特別な啓示を受けたと主張したのでしょうか。ラッセルは、『ものみの塔』誌の中で、謙遜にこう答えました。『…神の代弁者として私が示す真理は、幻や夢の中で、あるいは実際に聞こえる神の声によって啓示されたものではない。』」—「ふれ告げる」143

ラッセルは、「神から何らかの特別な啓示を受け」てはいないと認めています、「謙遜」にも自分を「神の代弁者」と見なしたということです。

この点がさらに707ページでは、こう書かれています。

「ラッセルの死後まもなく出版された彼の伝記はこう説明しました。『彼は新しい宗教の教祖ではなく、またそう主張したことは一度もなかった。イエスと使徒たちが教えた壮大な真理を回復し、それらの真理に20世紀の光を当てたのである。彼は神からの特別な啓示を得ているとは主張しなかったが、聖書の理解を得るための神のご予定の時が来ており、自分は主と主への奉仕のために全く聖別され、聖書を理解することを許されていると考えた。』

ラッセルは、「神からの特別な啓示」を何ら受けたわけでもないのに、自分こそ、他の誰でもない、自分こそ、真理を回復し、光を与えるものだと考えました。

それはつまり、まったく自分で勝手にそう思い込みました。という文章と同じです。

しかし、ともかくラッセルは、自分は「聖書を理解することを許されていると**考えた**」のです。それにしても「聖書を理解する事を許されていない」人というのはどういう人なのでしょう。聖霊に対する冒瀆というような罪を犯してでもない限りそのような人とはならないでしょう。ですから、彼がここで述べているのは「自分は聖書を正しく解明する資格のある者として神から選ばれた」と考えたということでしょう。（まあ、率直にこう言うてはあまりにもおこがましい響きがあるので「許されている」と表現したのでしょうが、どう表現しようが考えたことは同じです）ともかく自分をそのような者だと**考えた**ゆえに、自分自身を「神の代弁者」と見なすことができました。彼の考えによると、彼の理解は、即 神を代弁していたのです。

\*（ところで、この当時まだ「忠実で思慮深い奴隷」は任命されるずっと前の時代ですから、神は奴隷級を通して終わりの日に真の食物を与えるというご自分の預言を無視して、個人的にラッセルをお用いになったと言うことになります）

では、ラッセルは、どのようにして聖書を理解し、神を代弁することができたのでしょうか？

「チャールズ・テイズ・ラッセルは、自分の行なっていた聖書の真理の探究に関して、『私は、自分の心と思いの中から、妨げとなりかねない、いかなる先入観もすべて除かれるように、そして神の霊によって正しい理解に導かれるようにと祈った』と述べています。」—「塔」00年4月1日号、10p

あたかも例外的にこんな珍しい奇人な人がいた、というような書き方ですが、ふつうのクリスチャンの基本的な態度は誰でも皆こういうものではないでしょうか

「神はこの謙遜な祈りを祝福されました。ラッセルと仲間たちが聖書を精読してゆくにつれ、多くの事柄が明らかになりました。ラッセルはこう説明しています。『我々は、様々な分派や党派が何世紀にもわたり、自分たちの間で聖書の教理をばらばらにし、多かれ少なかれ人間の憶測や誤りを混ぜ合わせてきたことに気づいた。』・・・現代のエホバの証人の組織は、今や優に1世紀以上にわたって神の聖霊の指導にいつも敏感に従ってきました。エホバの霊が証人たちの霊的視力を漸進的に鋭くし、彼らは最新の理解に合わせるよう進んで必要な調整を加えます。』

—「塔」2000年4月1日号、10p

ラッセルは、自分で「気づいた」ことによって、エホバを代弁することができました。そして、エホバの証人の「統治体」も、「今や優に1世紀以上」にもわたって、自分で気付いたことをエホバの霊の働きに帰しています。[自分が]気付いたことを「神の聖霊の指導にいつも敏感に従ってきました。」と表現し、[自分が]気付いたことを「エホバの霊が証人たちの霊的視力を漸進的に鋭く」されたと、それを神に帰すなんて、何と謙遜なのでしょう。

現在のエホバの証人の「統治体」が受け継いでいるというラッセルの方法について、『ものみの塔』2000年3月15日号、12-13頁では、さらに、次のように述べられています。

#### 9節

「現代において、真の光がかすかにさし始めたのは、クリスチャンの男女から成る一グループが聖書を真剣に研究するようになった19世紀最後の四半世紀のことでした。このグループは、聖書研究の実際的な方法を編み出しました。一人が疑問点を提起すると、関係する聖句すべてを皆で分析します。ある聖句と別の聖句が矛盾するように思える場合、これら誠実なクリスチャンは二つの聖句の調和を図るように努めました。聖書研究者（エホバの証人は当時この名称で知られていた）は、当時の宗教指導者たちとは異なり、伝承や、人間の作った教義ではなく、聖書を導きとすることを決意していました。聖書研究者は、入手できた聖書的な証拠すべてを考慮した後、得られた結論を記録しました。このようにして、聖書の多くの基本的な教理について、明確な理解が得られるようになりました。」

他の誰とも異なることはないのです、当然ですが、できることと言えば、ラッセルもその後の会長、統治体も今日に至るまで、仲間と「皆で分析し」たり、「聖句の調和を図」ったりすることによって、得られた結論を「聖書の基本的な教理」とした。ということです、彼らはそのようにしたものを、エホバから言葉を受け取ったもととし、神のを代弁者を続けました。

#### 10節後半と11節

「ラッセル兄弟は、聖書のエゼキエル書と「啓示」の書を説明する第7巻も書くつもりでした。兄弟は「鍵となるものが得られたら、いつでも第7巻を書きます」と言いました。しかし、「主がだれか他の人にその鍵をお授けになるなら、その人が書けばよいのです」とも語っています。C・T・ラッセルが語ったこの言葉には、聖書の特定の部分を理解できるようになるための一つの重要な要素が示されています。それは、適切な時機ということです。ラッセル兄弟は、光が「啓示」の書を照らすよう自分の力で操作することはできないことを知っていました。」

#### 12節 脚注

「C・T・ラッセルの死後、エゼキエル書と『啓示』の書の解説を意図した『聖書研究』第7巻という名の出版物が作成されました。この本には、聖書のそれらの書についてラッセルが述べた注解に基づく部分が含まれていました。しかし、それらの預言の意味を啓示する時がまだ訪れていなかったため、『聖書研究』第7巻による説明は全体的に漠然としていました。」

「重要な要素」として「神が「光」を照らしてくれるように自分で操作することはできない」と述べていますが、それは結局、何も思いつかなかったということ過ぎないのではないのでしょうか。これのどの辺がどのように「重要な要素」なのでしょう。

しかしともかく、ラッセルの死後、J・F・ラザフォードが後を継いで、第七巻を完成させ出版されました。

これが、出版されたという事実はすなわち、その執筆できる内容に関して光が照らされるように

自分では操作できないのですから、当然「**主がその鍵をお授けに**」なったということを物語っており、そのための「**適切な時機**」であったということの意味しているということです。前述までの記述から言えばそうなるのですが、何故か、12節の脚注で述べられていることは大いに矛盾しています。

「**時がまだ訪れていなかった**」それは「**全体的に漠然として**」いたと記されています。

どちらが本当なのでしょう。

事実から言えば後者の方が近いと言えます。

それにしてもこの聖書研究第七巻を「漠然としていた」という言葉で表現できる人の感性は素晴らしいと思います。

私の手許には、この書籍の全文コピーがありますが、一口で言ってこの本の内容は全体的に「モノスゴイ」内容です。

（この内のごく一部の現物コピーは、「番外編—出版物」の中の「JW03 奴隷級に任命されたとされる当時の霊的食物—教理編」のなかで紹介しています。

どこを見ても、呆れかえるか、腹を抱えて大笑いするかのどちらかだろうと確約します。

上記と同じ「ものみの塔」13節には

「**聖書の特定の論題に光が投げられると、時々どんなことが生じますか。**」という質問が設けられ、その節にはこのように説明されています。

「**聖書のある論題に関してまばゆい光がきらめいたため、神の油そそがれた僕たち、つまり『忠実で思慮深い奴隷』が、関連したテーマを再検討するようになる場合があります。**」

一体どういうタイミングでなぜ光がきらめくのか、そもそも「**特定の論題に光が投げられる**」とはつまりどういうことなのでしょう。ともかく分かることは「まばゆい光」のきらめきが「再検討」の開始の合図となるということです。

それから「再検討」が始まる必要があるということは、「まばゆい光」は「要検討の開始合図」という働き以外の何かの役に立っているのでしょうか。それ以上の役割は果たしていないようです。もしそれが「神からの啓発」であれば、どうしてそれを人間が再検討するべきでしょうか。まばゆい光が啓発の類などではないから、人が集まってああだこうだと「再検討」する必要があるということでしょう。ではその「光」なるものの実体は、実際のところ、どこからの何なのでしょう。大いなる疑問です。

これがもし、集まって「再検討」していたとき「まばゆい光がきらめいた」という表現なら、その信憑性はともかく、話しとしては分かるような気がします。

結局の所、いつでも、人間が集まって「再検討」して決める分けですから、「光」がきらめいてから始めても、ただ何となく「再検討」しても、「定期的な再検討のための時間割」に従って行うものでも、何の変わりもないということです。

それと、「**再検討するようになる場合があります**」ということですが、ということとは、再検討しない場合もある、ということです。折角「まばゆい光がきらめいたのに」無視して放っておくこともあるようです。もしその光が「神」からのものであれば、神は大いに気を悪くされる事でしょう。

さて、ともかく、ここまでで、現在のエホバの証人の「統治体」は、エホバからの言葉の伝達経路として、神の言葉を伝えており、啓示や靈感を受けてはいないが、聖霊に導かれて研究することによって、つまり、自分たちで気付いたり、分析したり、聖句の調和を図ったりすることによ

って、神からの言葉を、引き続き受けている、ということが分かりました。

「奴隷級」は「靈感を受けていないが、聖霊の導きを受けている」と述べています。これは、クリスチャンとして個人的に聖霊の導きを得る、ということではありません。神の代弁者として、また霊的食物を供給する者として、預言を解明する資格を持つものとしてという意味です。そのような公認の有資格者、ライセンス保持者としての仕事であるにも関わらず、小さなことだけでなく、極めて重大な数多くの間違いがあります。例えば、1914年10月に、予想していた「天の『住まいに連れ去られる』こと」が起きなかったことについて、『ふれ告げる』、62-63ページには、こう書かれています。

「ラッセルは失望したでしょうか。『ものみの塔』誌1916年2月1日号の中で、彼はこう書いています。『…兄弟たち、我々が神に対して正しい態度を持っているなら、神のどんな取り決めに関しても失望することはない。我々は自分たちの意志がなされることを願ったわけではない。したがって、1914年10月に間違っただけの事柄を期待していたということが明らかになった時、我々は、主が我々に合わせてその計画を変更されなかったことを喜んだ。主がそのように変更なさることは、我々の願いではなかった。我々は、主の計画と目的が理解できるようになることを願うのみである。』

確かに、聖書研究者たちが1914年10月に天の『住まいに連れ去られる』ことはありませんでした。しかし、異邦人の時は確かにその年に終わりました。聖書研究者たちは明らかに、1914年の意義についてもっと多くのことを学ばなければなりませんでした。

では、それまで何をすべきでしょうか。業を行なうことです！『ものみの塔』誌（英文）、1916年9月1日号が述べているとおりです。『油そそがれた者たちの教会を集める収穫の業は、異邦人の時が終わる前に完了すると我々は考えていた。しかし、そのようなことは聖書の中には書かれていなかった。』」

これまでの説明と、上の文章を併せて要約するとこういう事になります。

「まばゆい光」がきらめいたことによって、皆で分析し、調和を図ったゆえに間違いなく1914年10月に「天の住まいに連れ去られる」ことは神のご意志であると言明し、神の言葉として広く世界中に宣べ伝えた。そしてその日が来て、それは間違いであることが判明した。

さて、ここで注目しなければならないのは、その出来事を「我々は自分たちの意志がなされることを願ったわけではない。」と述べてしまっていることにあります。

神の計画、ご意志だと広く伝えておきながら、実は何を隠そう、ただ「自分たちの意志」だったということを図らずも告白してしまい、その上さらに主が自分たちの意志に合わせてご自分の目的を変更してしまうに違いないことを本気で心配して、どうかそれだけはしないで欲しいと願っていたことが分かります。「謙遜な人」とはそういうものなののでしょうか。

そして「我々は、主の計画と目的が理解できるようになることを願うのみである。」という悲痛とも言える言葉から、実は「神の代弁者」「神の言葉を理解することを許されている」という自らの立場にまったく自信をもっていなかったことはつきりと読み取れます。

こんな無責任な言葉を堂々と述べ、なおかつ、それ以降も何も変わらず、依然として、自分たちだけが、神の言葉を扱う有資格者だと言い続ける神経には、確かにただ者ではなかったことというのを思い知らされます。

しかしそれでも彼らは引き続き、聖霊に導かれて聖書を研究し、彼らの聖霊は聖書の中には書かれていなかったことを神の計画と見なすように導きました。そのように導いた霊が、神からのものであったかどうかは分かりませんが、そういうことになっています。

ともかく彼らはまったく理解していませんでしたが、神を代弁することができました。

『ふれ告げる』、631－637ページは、1878年、1925年、1975年にも、同様の「間違いがあったこと」を認めています。

＊（しかし実際は、過去のものみの塔を見れば分かりますが、他にも1840年、1844年、1910年、1914年、1915年、1918年、1919年、1920年にも同様の間違いがあったことが分かります）

しかも、1878年を特定した考え方が1914年、1925年を特定する裏付けとして用いられ、1925年が何事もなく経過した後に、「聖書に基づく年代計算の全体的な枠組みを見直した結果」1975年が注目されたことを説明しています。

しかし不思議なことに、「ふれ告げる」104ページには、「1963年に、『聖書全体は神の靈感を受けたもので、有益です』と、う本はこう述べていました。『時の流れの中でなお将来の事柄に属する種々の年代について推測するのに聖書の年代記述を用いるのは無駄なことです。』」と述べられています。つまりすでに1975年より12年も前に「それは無駄なこと」と書いておきながら、聖書の年代記述を元に1975年ハルマゲドン説が計算されているのです。この年の少し前に会社を退職したり、家屋を売り払ったり、貯金を使い果たしたりした人が大勢いたことを覚えている方も少なくないでしょう。

そして現在では、エホバの証人の「統治体」が将来の特定の年代に言及することはもうしないということにしたようです。

まるで、度重なる2日酔いに懲り懲りした人が「もう酒やめた」と言っているかのように「もう年代設定やめた」と言っています。

しかし、いくら度重なる失敗を経験したとしても、年代計算をすること自体は、神のご意志だったのではないのでしょうか？ そうでなければ、間違いを認めて何度も何度も繰り返し100年以上に涉って年代計算をし直したのは、一体何だったんでしょうか？

「種々の日時を探求する、あるいは一「世代」の文字どおりの長さを算定することによって何か得られるのでしょうか。いいえ、何も得るものはありません。」ー塔95 11/1 19ページ 8節

どういふつもりでこう述べられているのかは分かりませんが、「一世代」の長さだけでなく「種々の日時」の探求や、算定することには何も得るものはない、無駄なことであると言っています。

この「種々の日時」の中には当然、BC607年から、2520年を足して、1914年などというものもすべて包含すると思うのですが、「それはそれ」という感じで、別に何も気に留めていないようです。

さて、年代算定の間違いについて、『聖書から論じる』、352ページには、「証人たちがいる期間の終わりに起こる事柄を理解する上で間違いをしたことがあるのは事実ですが、信仰を失ったり、あるいはエホバの目的の成就に注意を払わなくなったりする間違いはしませんでした。」



と述べられています。

この文章の意味するところは、「**信仰を失ったり**」する間違いに比べれば「**終わりに起こる事柄を理解する上で間違いをした**」ことなどは、取るにたりないと言うことのようにです。

ここで「[ 統治体 ]が、もしくは[ 組織 ]が終わりを算定する上で間違いをしたことがあるのは事実です」とは書かれていません。

間違いをしたのは「証人たち」です。もしあなたが「エホバの証人」なら、あなたも他人事ではありません。この事に関してはあなたも同罪です。たとえ身に覚えがなくてもそういうことになっていますので、ちゃんと自覚してください。

ともかくそれを算定して間違いはしましたが、それがどれほどとんでもない勘違いであれ、信仰を失うという間違いはしていない限り、自分たちの意志を神のご意志であるかのように延々と言い続けるという間違いについて「とやかく」言われる筋合いはないということです。

それにしても1975がはずれたために世界中で伝道者が激減しました。それはつまり「**エホバの目的の成就に注意を払わなくなったりする間違いをした**」人が大勢いたということです。その血の責任は誰がとるのでしょうか。

どこの誰が、どれほどの人が信仰を失おうと、年代算定をした張本人である「自分たち」は「信仰を失う」という間違いはしていない、と平然と言ってのけられる人々の心には、「人をつまづかせた」という事実には何の思いも浮かばないように、実に晴れ晴れとしておられる様子が見えます。しかし、キリストの思いとはかけ離れているであろうことだけは断言できます。

「わたしに信仰を置くこれら小さな者の一人をつまづかせるのがだれであっても、その者にとっては、ろばの回すような臼石を首にかけられて、広い大海に沈められるほうが益になります。」  
(マタイ 18:6)